

■日中震災復興フォーラム開催

多文化共生研究所客員共同研究員 王 曉葵

2011年3月11日の東日本大震災は、莫大な被害をもたらしたと同時に、現代社会における自然災害への見方について再考を迫った。これまで「非常事態」とされてきた地震、津波、洪水などは、もっと身近な「日常」的出来事として認識しなければならない。過去の災害から来るべき災害を防ぐ智慧を引き出し、防災、社会安全システムの構築に役立たせることは、災害歴史研究の最も重要な使命である。また国際的な災害史の比較研究は、災害に関する知識、防災の経験や教訓の共有、災害救援体制の整備にもつながる。こうした認識を踏まえ、愛知県立大学多文化共生研究所では、2011年10月25日に、国際フォーラム「日中震災復興フォーラム」を開催した。このフォーラムは、「近年日中両国に頻発した大震災に対する両国の震災復興策の設定、実施にあたって、それぞれの政治体制、社会構造、歴史文化などどのように関わっているのか」を論議することを目的とした。発表者とコメントータは日本、中国の人類学者、民俗学学者、歴史学者など合わせて8名である。

【フォーラム発表者・発表テーマ】

「日本における災害の記録と記憶—東日本大震災と関連して」

川島秀一・宮城教育大学非常勤講師、
リアス・アーク美術館副館長

「民俗のカー過去とのつながり、未来へのつながり」

櫻井龍彦・名古屋大学国際開発研究科教授

「青海玉樹地震の復興とチベット文化」

田兆元・中国華東師範大学人類学・民俗学研究所所長・教授

「中国の地震復興におけるボランティア活動について」

田阡・中国西南大学歴史文化学院・民族学人類学部教授

「四川大震災の復興とチャン族文化」

耿静・中国四川省民族研究所副研究員（チャン族）

【コメントーター】

羽賀祥二（名古屋大学文学研究科教授）

松岡正子（愛知大学現代中国学部教授）

稲村哲也（愛知県立大学教授 多文化共生研究所所長）



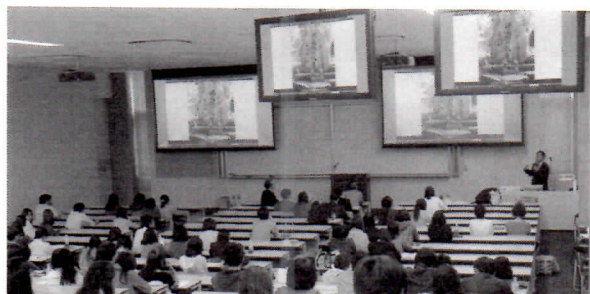
（上・下）フォーラムの発表者

発表者はそれぞれ自分のフィールドワークの資料に基づき、具体的な事例を挙げて、災害復興と社会文化、政治制度などとの関係を分析した。川島氏は東北の被災地にある災害情報を記した記念碑、慰霊碑などの分析を通して、災害伝承の大切さを強調した。櫻井氏は日本の民俗芸能は被災者の心を癒し、震災復興に役に立つ事例の紹介、災害民俗学研究的の緊急性を力説した。田兆元氏は青海玉樹地震の復興におけるチベット仏教の役割を紹介、行政による震災復興における支援側と被災者間のコミュニケーションの重要性を指摘した。耿静氏は四川大震災におけるチャン族の民俗文化の被害状況及びその保護策を提言した。田阡氏は震災ボランティア活躍による中国の市民社会の可能性を分析し、中国のボランティアの独自性を明らかにした。

フォーラムは午前（専門家と一般参加者による発表、討論）と、午後（県立大学の学生と一般市民への公開発表）に分けて開催した。以下では、発表と関係する論文4篇を掲載する。



午後のフォーラム終了後の記念写真。通訳ボランティアのチンサさん、王曦敏さん、事務の木村由佳さんと。



午後のフォーラムで発表する川島氏。ご自身も被災された。